

と云つて、今迄震へてゐたものが、俄に勇氣を出して参りました。すると姉は、

「駄目ですよ、若し二人とも殺されたら、このことをお父さんに知らして、仇を討つて貰ふ事が出来んぢやありませんか。そんな事を言はないで、姉さんの言ふことを聞いて、早く押入の中におは入りなさい。」

と無理に妹を押入に入れて、その身は襦袢を十文字にかけまして、床にかけてある寶刀を取り、盜賊を斬る覺悟をしました。

さて覺悟はして見ましたが、前にも申しました通り、年若き弱女の身ですから、とても手向つた所で勝つ見込はありません。そこで菊枝はよい考へを出しました。それは、盜賊が荷物を擔いで、玄關の階段を下る時に、隅の暗い所に匿れてゐて

斬り附けると云ふことであります。これは餘程よい考へであります、いくらずう／＼しい盜賊でも玄關先には火を燈しませんから、重い荷物を擔いで出る所を、暗討にすれば、うまく参りさうであります。

(つづく)

### 嗅ぎ當てる法

これも、一寸面白い手品ですが、ごでんじゆしませう。

先づ、四五人集い居る處で、させるを一本出して自分が、後ろ向いて居る中に、させるの吸口でもがんとびでも、中央でも、どこでも思ふ所を觸つて置いたら、自分は、夫を見ないで居て、嗅ぎ當て、見せるといふのです。すると、皆が面白がつて、そんならといふので始める。自分は後向くか

目を隠す。

但し、此四五人の中で、一人手品師の味方が居るのです。夫は味方だといふことを誰にも知らさないで置かねばなりません。

手品師が見ないの中に、先づ誰か、させるの吸口に觸つたとする、よしと相圖すると、手品師は、此方向いて、一生懸命に嗅き始める、而し勿論、幾ら嗅いだつて、分る筈がないのです。そこで、其四五人の中の味方を、側目で見ると、其人が、若し今吸口を觸つたのであると、自分の持つて居たもの、例令ば鉛筆でも何でもよい、夫を何氣なしに口にくわへて相圖をする。若し、真中だつたら、鉛筆の真中をいじくつて居る、若しがなくびであつたら、鉛筆のけづつた方をいじくつて居るそこで、手品師は、鹿爪らしく、しきりに、させ

るのアツチコツチを嗅いで見ながら、そ一つと、其味方の相圖を見て、若し味方が、尖の方をいじつて居ると、あゝ分つた、がらくびが臭ふ様だ、がらくびだゝといつて嗅き當てるのです。

言つて見れば、何でもない様ですが、知らない人は、吃度不思議に思ひます、皆さん、お友だちを集めた時、一つ慰みにやつてごらん下さいまし。

### 軍服の色

日本の軍人の服は、今度の戦争には、皆薄茶色に染めた、カーキ色といふのになつて居るのは、皆さん御存知でしょう、カーキ色といふのは、アフリカの南に在るカーキ河といふ河の名から來たので、先年、英吉利とポーアと戦争した時ポーア人は、此河の泥で染めた軍服を着た。夫が即